

# 教 仁 名 聞

第85号  
(発行日)

2017年10月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日 午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日 午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日 午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

## 真実は生きてまします

現代の私たちはややもすると、「人生は楽しく過ごせば、別に真実はあってもなくてもいい」と思っています。あるいは「真実などはない」と思っています。あるいは「真実を知らなくても人生はやっていける」と思っています。あるいは「真実はあるだろう、しかしそれを知ることとはとても難しく不可能だ」と思っています。

仏教は、釈尊の最初から「真実はある、それを求めよ。真実を知らないから人生に苦は絶えず、人生はむなしく終わってしまうのだ」と説き続けてきた教えです。

仏教で真実を「法」といい、仏教の歴史は法を説き続けてきた歴史です。

ヘーゲルという優れた思想家が「真なるものは実在である」「真なるものは全体である」といったそうです。

要するに真実(法)は真の実在であり、それは全体であってすべてに遍満している、

ということでしょう。真実は私たちに離れておらず、私たちは真実の中にあり、それが本当に実在しているものである、ということでしょう。

「いや真実はあるかも知れないが、それよりも私の存在の方が確かである」というのも、そういつている(私)はしばらくすればこの世のどこにもいないでしょう。この世から消えてなくならない人はどこにもいない。しかるに真実は二千五百年前の釈尊の時代にもましまし、八百年前の親鸞聖人の時代にもましまし、現代にも働いてまします。しかも誰の上にもどこにも働いてまします。真実(法)こそ(ある)ものであって、人としての肉体的な存在は明日もわからない不確かな存在です。私の存在ははかないけれども、真実は常住です。

真実にあわず、真実を拠り処とせず、真実がましましても、それに無関心である生

活は「根無し草」の生活であり、浮き草のような生ではないでしょうか。

「浮かれたまいたる人なり」との厳しいお言葉があります。真実に根ざしていないと、たとえ「楽しい生活」であっても、どこか空虚であり、空しく過ぎる生ではないでしょうか。心の底でははかなくすぐ去っていく日々をやりきれなく感じているのではないのでしょうか。

そこに空しさやはかなさや、さみしさやあるいは死んでいくことの不安を感じて、なんとか確かなより処を見出したい、実のある人生を送りたい、また死の不安を解決したいという人が何時の時代にも当然出てくるものです。それゆえ仏教は二千五百年も続いてきたのであり、これからも続くのでしよう。

現代日本のような便利で、ある意味快適な物質文明は果たしていつまで続くのでしょうか。歴史上このような生活は戦後わずかな年数しかたつていません。今の状態は一時的分かりません。

もつと平和で豊かな時代が来るかも知れません。あるいは地球の温暖化が更に進むとか、世界の何百基あるかもしれない原子力発電所が事故を起すとか、地域の紛争が激化するとか、難民が押しよせるとか、この先何が起るか分かりません。

未来は予測不可能ですが、たとえ未来は絶望的であっても、真実(法)は常住でありいつでも今ここに働いてまします。その働きは私たちに南無阿弥陀仏となつて喚びかけてまします。「我、今汝と共にあり、われをたのめ」と喚びかけてまします。平和なときにも、戦争の最中も、災害のまただ中でも、仲のよい家庭にも、ケンカの多い家庭にも、大勢の中にいる時も、孤独の時も、真実である如来様はいつでも今ここにまします。そして、南無阿弥陀仏とご自身を知らせ、「私はあなたとともにいる、あなたをおさめ取って捨てない、あなたを浄土に連れて行く」と仰せくださっています。ここに軸足を置いて現実を生き抜いて生きていくものです。

# 一々の花はなのなかよりは

(和讃問答)

一々の花はなのなかよりは  
三十六百千億の

光明てらしてほがらかに  
いたらぬところはさらになし

一々の花はなのなかよりは

三十六百千億の

仏身もひかりもひとしくて

相好金山のごとくなり

(宗祖・浄土和讃)

現代語訳（浄土の宝蓮華の一々の華の中から無量無数の光明を放ち、その光明は朗らかに照らして、十方世界にいたらぬくまもない。一々の華の光明からそれぞれ無数の仏身が現われ、仏身の数も光明の数もひとしくて、仏身のおすがたはまばゆいこがねの山をみるようである）

D 「浄土には宝の蓮が一杯咲き、その一々の蓮の華から百千億の光が出ているが、花びらは六色があり、六色の花びらの光が互いに反映し合って三十六百千億のひかりとなっ

て、十方の世界を照らす。浄土は無数の蓮の華から放たれる、その一々の華の光が仏身としてあらわれ黄金色にかがやいている、と形容されています。こういうご和讃をお聞きしますと、浄土のイメージが更に豊かになります」

N 「これらのご和讃は非常にリズム感がよく口ずさまずにはおられない響きがありますね」

D 「こうした状況は仏説無量寿経に説かれているのですが、このように美しい色と光のイメージで浄土がいかに素晴らしい世界であるかを表現されているのでしょうか」

N 「ところで三十六百千億の光明とは」

D 「一つの蓮の華より百千億（一〇〇〇億の百倍）の光明が放たれ、その花びらは青色・白色・黒色・黄色・朱色・紫色の六色あつて、しかもそれぞれの色が互いに交わり合つて、六かける六で三十六色の光の色となつて放たれている、といわれています。ただ

ここで三十六百千億の光明というの（数量でもつて非数量を顕す）のであつて、三十六百千億のという数量で無量無数の光明を表されるのですね」

N 「浄土の光明とか阿弥陀如来の光明と、よくお聞きするのですが、どこにそのような光明が輝いているのでしょうか。というのは仏教のお話でよく光明についていわれますが、その光明はどこに光っているのかという点が気になるのです」

D 「当然のご質問だと思います。それについて先ず、普遍的な真実があり、真実こそ実在であつて、虚妄のものではないと言ふことです。そしてその真実実在はどこどこまでも行き渡つていふということ。先ほどのヘーゲルが「真なるものは実在である」といふのは全体である」といふように、いわゆる真実の実在は普遍的な働きであるということでしょう」

N 「普遍的な真の実在を真宗ではどう表されているのですか」

D 「真実実在の働きを私は寿命無量とお聞かせていただいております」

N 「寿命無量というはかりなきいのちの働き、それが真実なるはたらきなのですね」

D 「ええ、ただし、いのちと生命というと、私たちはすぐ対象的に物質的な領域のみを考えます。しかし真実実在としての無量の寿命は私たちが見ている対象的な物質的な面だけではなくて、見ている私たちもその中にいる広大な実在の働きでしょう」

N 「確かにいのちと言えば、無機物や有機物の世界、そして有機物から生物、生物から人間のいのちと展開してきたという風に習つてきて、そういうのを生命の働きとかいのちの働きと聞いてきました。それは対象化されたいのちであつてまだ全面的ないのちではないのです。対象的に見られ観察されているいのちの世界しか私たちは考えていませんが」

D 「いわゆるそれは自然界であり、自然科学が取り扱っている領域ですね。私たちがいのちといつてもそこではか考えていませんね」

N 「いわゆる物質的な領域としての生命しか知りません」

D 「ですから、佛の光明とか浄土の光と言うような光は対象的にはどこにも見いだせま

せん。ですから仏の光明などというと単なる比喩か空想のように思われるのですね」

N 「そうすると阿弥陀仏は光明無量であるという場合の光明はどう受け取つたらいいのでしょうか」

D 「その点ですね。私たちが対象的に知る領域ではなくて、対象化して「知る心の領域」があるということです。仏の光明はこの心の領域の光ではないでしょうか」

N 「心の領域があるということですね」

D 「心の働きを私たちは非常に狭く考えています。それに、心は空間的なイメージでは捉えにくいのです。ですけど、心の領域は質的に非常に広大で深い領域であると私は思います」

N 「難しいですね」

D 「そこで私自身が心が広大であるということを感じたあの思想家の言葉を引用します」

N 「どのような言葉ですか」

D 「それはフランスのフレイズ・パスカルという著名な思想家の言葉です。（パスカルの原理）でも有名で中学時代に習つたことがあるでしょう」

N 「理科で習いましたね」

D 「彼は科学者でもありまし

たが深い思想家でもあります。彼の言葉（パンセ）に

人間はひとくきの葦にすぎない。自然の中で最も弱いものである。だが、それは考える葦である。かれをおしつぶすために、宇宙全体が武装するには及ばない。蒸気や一滴の水（毒）でも彼を殺すのに十分である。

だが、たとい宇宙が彼をおしつぶしても、人間は彼を殺すものより尊いだろう。なぜなら、彼は自分が死ぬこと、宇宙の自分に対する優勢を知っているからである。宇宙は何も知らない。

空間によつては、宇宙は私をつつみ、一つの点のようにのみこむ。

考えることによつて、私は宇宙をつつむ。

魂の非物質性。

と書いています」

N 「少し詳しく説明して下さい。へ人間は一本の葦にすぎない。しかし考える葦である」という言葉はよく聞きます」

D 「人間は一本の葦にすぎないということは、人間は物質であるという点からいうと、ごく小さな物に過ぎず、一滴の毒薬で死んでしまうような弱い存在だということです。

実際そうですね。こけて打ちどころが悪いだけで死んでしまうような存在です。宇宙から言うときく小さなチリほどにもならない物体です」

N 「けれども（考える葦）だといわれるのですね」

D 「ええ、ここで（考える）という意味は単に思考するという狭い意味以上の（知る）ことができる」という意味がありましょう。知覚する、認識する、思考する、そういうことのできる存在だといわれるのだと思います」

N 「人間は小さな物にすぎないが、しかし知る働きがある、考える働きがあるというのですね」

D 「ええ、これは非常に大事なことです。物質はどれほど大きくて広大でも、たとえば太陽や月や星々はどれほど大きくても、物質であるかぎり、自分が何ものかを知らない。太陽は自分が太陽であること、間ももし物質だけだと宇宙空間そのものを知らない」

N 「ということは私たちは肉体をもつていますが、もし心がなく物質的な肉体だけなら、肉体を肉体であるとも知れないですね」

D 「ええそうですね。花が咲き、

月が照らし、山があり川があり人々がいる。それをそうと知れるのは人間に心があるからです。知る働きがあるからでしょう。知る心がなければ、宇宙も自然界も知れず、人々も知れず、親も子も知れず、人生そのものもありません。私たちは大自然の働きに驚きますが、大自然の働きを知ることができる心もまた驚嘆すべき働きです」

N 「パスカルが、物質的な（宇宙は何も知らない）といっているのはこのことなのです。そして宇宙は私を一つの微小な一つの点のようにのみこむ、けれども私たちは知る働きがあり考える力があるから逆に（私は宇宙をつつむ）ことができる。私の心は宇宙の星々や太陽などを認識することができる。不思議ですね」

D 「ですから外の大自然、物質的な宇宙空間は広大でありますが、それをそれと知る心も質的に広大な働きであり、質的に限らない領域であるといえるのではないのでしょうか」

N 「では私個人の心は無量無限なのでしょうか」

D 「ただ一人の人間の心は広大無量な心（あるいは意識）のな有限定された心だと思

ます」

N 「人間以外でも心（意識）を持つている生き物は無数にいますね。それぞれが広大無量な心の限定された心をもっているといえるのでしょうか」

D 「そう考えたいですね。私たちの心は限定されています。しかし無量の心の中にいます。その大きな心と私たちの心とは切り離せません。別ではないですね」

N 「私たちの心は無量の心の中にあるのですね」

D 「ええ、親鸞聖人は無量の心について、この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり。（唯信鈔文意）

といわれ、如来とされていきます。ただ私たちは無明によつて、大きな心の中にあることを知らず、自他を分け隔てています」

N 「私たちは迷っているということは、大きな心（如来）の中にあつてもそれを知らずに、大きな心と別なものと考えてしまうのですね」

D 「ええですから迷い（無明）があると、心は閉塞されて、暗いのでしょうか」

N 「そんな無明の闇の中にいるのが迷える衆生の心なのですね」

D 「ええ、それを悲しんで光明で照らし、無明の闇を破り、真実を知らせたいと働いて下さる心の光が仏の心光といわれるのでしよう。阿弥陀仏の光明は広大な心の領域に働いていて、迷い苦しむ衆生を救う働きをして下さる心の光でありましょう」

N 「そうすると浄土や佛の光明とは、対象的な物質的な領域で知られるのではなく、広大な心の領域での光であつて、それは私たちの心において知られるのですね」

D 「ええ、仏の光明は私たちの心に働きかけ、私たちは仏の心光を私たちの心に於て知らされるのでしよう。外の物質的な領域に仏や浄土を見出すこととしてもそれはできないことであり、私たちの心において知らせていただくのですね」

N 「仏の心と私たちの心との関係、そこのであいなのですね」

（了）

# お便り

## T・S氏のお便り。

(T・Sさんの所感『木村無相師臨終法話注記』からの9月号よりの続きです。)

「歎異抄」に「善信が信心も聖人の信心もただ一つなり」と親鸞聖人の仰せがあります。が、今は無相の信心も親鸞聖人の信心も一つなりと一人で喜ばせていただいています。

(木村無相)

☆私思う。これは親鸞が思う信じ心でもなく無相師が思う信じ心でもない。凡夫相応の我が機のための本願であったと信ぜられることが信心であります。親鸞聖人といえども無相師といえども我が機において地獄一定であります。本願相応の正客の極悪人であるこの私にかかり切りの本願念仏であるぞと知らされたる姿が「法然上人の信心も親鸞の信心もただ一つなり」のところである。凡夫の信じ心ではありません。本願相応の凡夫の機と弥陀に信知されたのが「善信が信心も無相師の信

心もただ一つなり」のところであります。お前は死ぬまで信心はない、助からぬと如来にハッキリと信知されたところ如来より給わる信心であります。その凡夫のための本願心南無阿弥陀仏であるがゆえに我にとつては絶対の救いとなり、如来の信心であるがゆえに若存若亡とならないのであります。私のつかむ信心と誤解するから、教えるから迷い苦しむのであります。私の心に一切用ナシ。弥陀の願心ゆえの信心であるがゆえに金剛の信心となる。ここにおいて、我が宿業は絶対の無能のまま弥陀の願心に相応し信頼され安心させられるのであります。我が煩惱のまんま弥陀の願心相応の機と弥陀に照らされるがゆえに我が無能の宿業に無能のまま落ち着くことができるのである。私の信心でないゆえに弥陀の信心に落ち着くことができ若存若亡にならないのであります。これを金剛の信心という。

ただ念仏申すほかに私の信心、安心はありません。凡心が信ずるとか疑うとかは一切問題ではありません。ただ仰せのみただ勅命のみであります。(木村無相)

## (H・Mさんのお便り)

私の母親は、私が六才の頃から仏法の話聞かせてくれました。ですから仏法を聞いて信心をいただきたくとずつと思いつつも(仏法をきかせていただいた三十八年間位たちます)なかなか信心が届いて下さりませんでした。ある時から、先生の説教に遇わせていただいて本當に有難かつたです。お念佛、南無阿弥陀仏は、助からぬこの者をこそ、そのままなりで助けるとお聞かせにあずかりまして、ああ南無阿弥陀仏と言う言葉はそういう事でありました、と気づかせていただきました。それから数年がたちました。今では、口からお出まし下さるお念佛、南無阿弥陀仏のお声を耳に聞かせていただき、そのお念佛の声を心の抛り処とさせていただく、日々の生活であります。如来様からお

念佛をお与え下されていた事に長い年月気がつかずにいました。

南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏・本當に申し訳ない事でありました。南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏

私は人間界に生まれさせていただき、遇う事の難い仏法に遇わせていただきました事、阿弥陀如来様のお計らいでありました。ようこそようこそとお念佛をさせていただきより他はありません。南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏、ありがたいことです。

でも私の本當の相は、お念佛を称えさせていただけでもすぐにお念佛を忘れてしまつて欲の心がすぐ出て来ます。これが私の本當の相であり、お恥ずかしい者であります。ナムアマダブツ・ナムアマダブツ

(了)

(続く)



## 《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(金)午後二時始

講師 滋賀県・大谷派玄照寺住職 瓜生 崇 師

\*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

木村無相さんの法信9